

いしかり 謠

- 開拓時代の馬産について……………金子 伸久… 1
- 理髮業一代……………駒井 秀子… 6
- 北大中央図書館内北方資料室所蔵
村山家文書中に包蔵せる
井尻静藏家文書目録……………長谷川 嗣…13
- 子供にきかせる石狩町の昔話 II
花川南地区……………鈴木トミエ…18
- 子供にきかせる石狩町の昔話 III
「サケとわかもの」……………鈴木トミエ…22

第 3 号

石 狩 町 郷 土 研 究 会

1982. 1月

開拓時代の馬産について

金子伸久

我々の祖先が開拓に入った当時の北海道はうっ蒼たる大古自然の原生林の中で始められた。背丈を越す熊笹や空を覆いかくす大木を筏り開き毎日が苦難の連続であった。

此の様な状況なので物資の輸送等も陸路より海路、或は川を利用しての舟運に頼っていたので官より支給される扶助米や其他必需品は途絶え勝ちで況や冬期間は全く孤立した状態になるので何ヶ月分の糧末を調達保管する方法をとっていたものと思われるが、之等物資の陸路の輸送方法としては道とてない沢地帯や平地の樹木の少ない所を選び屈強な若者の背によって運搬しなければならなかったが、地方によっては馬が大きな運送の方法に用いられていた。例えば安政五年に石狩調査役の荒井金助は山越内より馬二頭を購入したのが石狩に馬の入った始めといわれ、翌安政六年石狩役所足輕龜谷丑太郎、胆振、日高方面より馬四十頭以上を石狩に持ち来り発寒を中心放牧し石狩・銭函・発寒間の陸運に当てたといわれる。尙當時の開拓者には諸物資の外に馬一頭宛官給された様である。

北海道に馬が入ったのはそれ以前と思われる。東北地方から移住

第一号ともいべき安東威秀一族が永享年間（一四三〇年代）に渡道しており、松前藩の祖先といわれる武田若狭守信広は享徳三年（一四五四年）に渡道しその後も東北地方から相ついで渡道しているので、当然馬を連れて来たものと考えられ（八戸芳夫ドサンコより）、又一方慶長二年（一六一五年）松前慶広が乗馬用として奥州から連れて来たのが北海道の馬の始まりと説く人もいる。何れにしても北海道に馬が来たのは江戸時代からで奥州から出稼ぎに来た漁場の請負人が運搬用に、交通用に馬を連れて来て、仕事が終り帰る時ほっぽり出された馬がドサンコの祖先になったと思われる。（鈴木八郎「競馬百科」より）

開拓時代の北海道は熊、狼等による被害が非常に多く、主に鹿が狙われたのであるが移民が殖えるに従い家畜に牙を向ける様になった。そこで開拓使は奨励金を出して之等害獣の駆除を行った。移民もオチ／＼家畜を放し飼いに出来なかつた事は勿論、人間さえ襲われる事があつた様だ。特に深刻な脅威に曝されていたのは日高の開拓使新冠牧場という。米人教師エドウィン・ダンは明治八年から茲で道産馬と南部馬、輸入馬等の交配による品種の改良を進めていた。然し明治十年頃には「狼を絶してしまふか、或は新冠に於ける馬の育成事業を打ち切つてしまふか、何れかに決めなければならなかつた。特に明治十二年（一八七九年）の大凶作で食べ物も失つたオオカミの大群が馬を狙い毎日／＼多くの馬が倒される。そこで米国よりストリキニーネが取り寄せられ、殺された馬にストリキニーネが仕かけられた。翌朝住民が見たのは恐しい光景であつた。おびただ

しい血を吐き目をむいて死んでいる狼の山、地獄絵の様だったとい
う。(日本に於ける半世紀の回想による)

「明治十年頃には動物にひかせた車や櫓等は札幌市中では殆ど見
る事が出来ず、皆人間が引いて歩いており、動物力による農具とい
うものは札幌近所の農場には一台も見ることが出来なかつた様である」
之は札幌農学校教師ブルックスの話である。

明治七年ロシアに派遣されていた榎本武揚が約一年間に亘つて行
われた樺太・千島交換条約が明治八年五月七日締結され、帰国の際
馬車・馬櫓等を持ち帰って黒田清隆に見せ、黒田はそれを借りて工
業局に試作させたりもしているのであるが、ブルックスの話でまだ
実用化していなかつたのであろうか。

其後黒田長官の農業振興についての意見により、東京麻布に第三
官園(約十町歩)を造りアメリカ式農場と牧草地、家畜場があり、
実習生にその用法を教え夫を更に一般農家に伝えさせるといふのが
狙いであつた。

従つて明治十一年頃の函館七重官園や東京第三官園でプラウ耕法
の実習に馬を使つている写真が北海道新聞(昭・41・1)に載つて
いるが、此の頃から馬の農作業は急速に広まつたものと思われる。

扱花畔に於ける畜産の状況は詳かでないが(花畔又は石狩町の畜
産に詳しい方の資料発表を期待したい)明治二十九年四月「花畔牧
畜会」を結成、其時の規約条文及契約書に依ると花畔下の学田地六
万坪(花畔北六線・北七線の学田地)を借り受け一人出資金貳拾円
で第一回の会員資格取持したる者十六名で「馬疋ヲ改良シ社会ノ需

要に應ズルヲ目的トシ」発足している。左にその規約を掲げて見よ
う。

花畔共同牧畜会規約

第一条本会ハ花畔共同牧畜会ト称シ其創立事

務所ヲ花畔村三十八番地ニ置ク

第二条本会ハ先ツ花畔村下ノ学田地六万坪ヲ

借受ケ湿地ニハ牧草ヲ蕃殖シ乾燥地ハ

放牧場トナシ漸然歩ヲ進メ馬疋ヲ改良

シ社会ノ需用ニ応ズルヲ以テ目的トス

第三条本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ資金貳

百円以上ニテ創立シ毎年募集金額貳千

円ニ滿タル時株式会社トナス

何人ニ限ラス資金トシテ金貳拾円ヲ出

ス者ハ会員タル事ヲ得

会員ニハ会員証ヲ交附ス

第四条資金ノ払込ハ滿二ヶ年ノ内四回毎年

四月 十月 二回払込モノトス

第五条本会ハ会務ヲ処弁スル為メ会員一同ノ

投票ヲ以テ理事二名ヲ撰挙ス

理事ノ任期ハ三年トナシ隔年其半数ヲ

改撰ス滿期後再撰スルコトヲ得ル

理事ハ事業ノ広張ニ從ヒ増員スルコト

第六条理事ハ名譽職トシ相当ノ手当ヲ支給ス

手当ノ額ハ會員一同ノ協議ヲ以テ之ヲ定ム

第七条理事ハ會員拾名ニ達スルヲ待テ總會ヲ

開キ事業着手ノ方法ヲ定ムルモノトス

第八条會員ハ資金ノ全額ヲ払込マザレバ會員

タルノ全權ヲ有セサルモノトス

第九条全額ヲ払込マシテ退会スルモ己ニ払

込タル資金ハ滿十年ノ後ニアラザレバ

之ヲ返却セス既ニ払込タル資金トイエ

ドモ之ニ利子又ハ利益ノ配当ヲ附セサ

ルモノトス脱会ノ申込ナキモ其期限内

ニ資金ノ全部ヲ払込マサルモノハ脱会

者ト做ス

第十条利益ノ配当及諸般ノ報告ハ年々十二月

卜定ム

右之通決定致候間會員一同茲ニ押印致候也

明治二十九年四月

理事 金子清一郎 印

理事 橋本 賢弘 印

會員及出資金額

石狩郡花畔村三十八番地

一金式拾円也 金子清一郎 印

石狩郡花畔村第七線八号

一金式拾円也 橋本 賢弘 印

石狩郡花畔村第壹番地

一金式拾円也 山本 多藏 印

石狩郡花畔村屯田新道

一金式拾円也 清水 倉太 印

石狩親船町十三番地寄留

一金式拾円也 北口 鶴吉 印

札幌区南二条西六丁目三番地

一金式拾円也 富所 広吉 印

石狩郡花畔村番外地

一金式拾円也 今野 俊徳 印

石狩郡花畔村番外地

一金式拾円也 田所 正義 印

石狩郡花畔村番外地

一金式拾円也 永井 新蔵 印

石狩郡花畔村番外地

一金式拾円也 藤中由太郎 印

石狩郡花畔村番外地

一金式拾円也 阿部 豊蔵 印

札幌区南一条西三丁目

一金式拾円也 長谷川栄助 印

札幌区南一条西四丁目

一金式拾円也 若月 保造 印

札幌区

一金貳拾円也

野末 栄順 ㊦

石狩郡若生町西五番地

一金貳拾円也

畠山清太郎 ㊦

石狩郡花畔村北十三線

一金貳拾円也

長部謙一郎 ㊦

契約書

石狩郡親船町外九町三村戸長加藤一魯ハ石狩郡花畔村小学校ヲ代表シ花畔共同牧畜会理事橋本賢弘・金子清一郎ヲ花畔小学校附属学田地ノ小作者トナシタルニ拠リ左ノ各項ヲ締結ス。

石狩郡花畔村小学校附属地

一、学田地 三千坪 表口三十間 奥行百間

但シ未墾地

石狩郡花畔原野殖民地第七線道路ノ北方

一、学田地 三万六千坪 東西二百間 南北

百八十間

石狩郡花畔村殖民地第七線道路ノ南方

一、学田地 二万四千坪 東西式百間 南北

百貳拾間 但シ未墾地

一、右未墾地六万三千坪ヲ明治三十年ヨリ全

三十六年迄六ヶ年間小作無料、七年目ヨ

リ壹反歩ニ付小作料貳拾五錢宛小作者ヨリ地主ニ納入スル事

一、右小作地ハ将来牧草播種及放牧場ノ見込

ニ付後年小作料増加スルモ壹反歩參拾五

錢ヨリ増スコトナク無期限ノ事 但シ小

作者ノ都合ニヨリ桑樹果木ヲ植付ルモ自

由ナルコト

一、此契約ノ地所、小作者ヨリ他人ニ貸与ス

ルコトヲ得ス

一、小作料停滞スルトキハ返地セシムル事ア

ルヘシ

一、小作者ノ都合ニ依リ小作者タル事ヲ止ム

ル時ハ此契約ハ直ニ消滅スルモノトス

一、年限ハ永久トスルモ学校ニ於テ必要ノ場

合ニ小作約定ヲ取消シタルトキハ此契約

モ消滅スルモノトス

前条契約致候間茲ニ連署スル者也

明治三十年三月十二日

石狩郡親船外九町三村

戸長 加藤 一魯

花畔共同牧畜会

理事 橋本 賢弘

理事 金子清一郎

本会借受ノ牧草地ノ中七線排水ノ北方六町

六反歩ハ明治三十四年四月二十九日野火ノ為

メ全焼ス。該畑ハ去ル明治三十一年ヨリ連続

野火ノ為メ焼失シ或ハ牧草ヲ刈取ルモ雨天続

キニテ其結果取支償ハズ実ニ困却ス

牧畜会日誌省略ス

此牧畜会が設立された事から推察するに農耕に或は運搬に日常生
活上缺く事の出来ない役割を果していたものと見られ明治三十八年
十二月調べの石狩町の統計によると左の通り記録されている。

石狩町内馬匹数
花川村部内馬匹数

(馬)	牡	牝	合計計
石狩	六一	八七	一四八
高岡	七五	六一	一三六
生振	一六三	一五九	三二二
花畔	一六八	二一四	三八二
樽川	一二九	七五	一〇四
合計	五九六	五九六	一、一九二

明治三十七年六月に第一回北海道畜産共進会を札幌中島遊園地で
開催、此の時石狩町、村田亀五郎が馬の部で二等賞を授賞した事か
ら馬産改良に力が注がれていた事がわかる。

昭和五年七月石狩町畜産改良会発会、家畜の改良増殖に力を入れ
毎年開催される品評会には優秀な家畜が多数出陳されて漸次その成
果が現われて来た。昭和二十八年馬産改良に一層成果をあげるべく

仏国産ベルシユロン重種優秀種牡馬グラジャートル号を購入交配
の結果続々優良馬が繁殖し石狩産馬の名声を全道にひろめた。

理髮業一代

駒井秀子

石狩町に生きたおんなたちの足跡を辿りたいということで、今回は理髮業一代街道ヒサさんにお会いした。お話を伺ううち、理髮業の歴史も知らず石狩町の場合漁家と農家相手とは同じ仕事でも条件が違うという事も知らぬまゝでは、ヒサさんのお話を充分に理解することが出来ないことを痛感することとなった。そこで、親船町の菊地欣吾氏には主に理容業の沿革史を、花畔の斉藤幸市氏には本町一帯とは異なる花畔村の特徴などお話いただいた。

石狩町理容業沿革

——菊地欣吾さん聞き書をもとに——

周知のように石狩の歴史は、慶長年間（一五九六―一六一四）に松前藩がサケの石狩場所を区画設定した時に始まるが、残念なことに理容業に関する文献は殆どなく、散在するカケラを寄せ集めてつなげるしかない。「北海道理美容史百年」というのが来年早々に刊行される予定で、それまではまとまった資料は無いというのが現状である。

石狩町企画課編になる年表によれば、場所設定以来石狩町の本町

一帯は常に北海道の歴史の華やかな部分として注目を集め、文化三（一八〇六）年石狩川を探険した近藤重蔵の報告「蝦夷地を治めるには石狩筋が第一の地」をはじめ、安政二（一八五五）年設置された石狩役所の採場が積丹より増毛までを含み、サツポロもその支配下になっていること等考え合わせると、本町一帯の繁栄は想像に難くない。「港々に女あり」ではないが、漁場が賑わって海の男たちが集まれば料理屋遊廓の繁盛はこれは定石である。遊廓が増えれば髪結もやって来たろうし、男前を競いたがった若い衆も多かたに違いないから、我がトコヤの歴史も相当に古いと考えて間違いはあるまい。

道理容組合に問い合わせたところ、北海道のトコヤの発祥地は江差で、今年がその元祖の開業から百年めに当たるというから、石狩の漁場にも間もなく開業するか、あるいは漁期を目あてに出張する理髮師が明治の二〇年代にはいたのであるまいか。厚田では明治三十七・八年頃この出張理髮が盛んであったということ、菊地さんは厚田の古老から聞いている。

ちなみに、理髮店の休業日が十七日だったのはこの元祖の命日を充てたという話をヒサさんから聞いた。現在では週一度休んでいるが、長い間月一回でその後三回になった時も七・十七・二十七と七の日に休んでいる。

さて理容関係の記事がはじめて文献に登場するのは、へ明治十三年（一八八〇）髪結職二戸五人である。それきりであるが、前出

年表の明治二十四年の項に「この年頃、さけ漁夫約二〇〇〇人入込む」とあるから、漁夫相手の髪結床も増々景気がよかったと思われる。

次に、石狩新聞社刊「石狩案内（明治三十九年版）」に「流行理髪、石狩親船町、勝又半四郎」の広告が掲載されていて、これが「理髪」という言葉の初見である。この勝又半四郎は菊地さんの祖父に当り、石狩町の理容史はこの人以後やっと現在につながるのである。ともかく明治三十九年に石狩理髪保健組合組合長は勝又半四郎であり、以後、勝又啓吉（昭八親船町）——街道善一（昭一五本町）——佐々木清房（昭二四八幡町）——伊藤良雄（昭三〇八幡町）——齊藤幸一（昭四一花畔）——松島慶四郎（昭四五八幡町）——阿部清明（昭五〇親船町）——菊地欣吾（昭五五親船町）と、現在に至っている。四〇年の間、街道理容院を守ってきたヒサさんの名前をこの中に見ることはできない。

尚、記録として残る理容業者数の変遷を追ってみると次のようである。

年	理容業者数（戸）
明治三十九年	九
大正五年	十六
十五年	十二
昭和五年	十一
十二年	七

石狩町の組合は厚田望来を含み、現在は新札幌団地、花畔団地の業者と合流して二〇戸に増えているが、本町一帯の業者は昭和七年現在で二戸、後三戸になってそのまま現在に至っている。

大正五年の十六戸をピークに以後二〇年を経ずして半減した原因は、言うまでもなくサケ漁の衰退による。

石狩警察署「石狩町沿革誌」、《石狩町遊廓沿革概要》を読むと、遊廓が最も繁栄したのは明治十二、三年の事で当時貸座敷三十六軒娼妓は三六四名にのぼり、「殆んど北海一ト呼バル、ノ盛観」だったとある。それが大正三年七月の調査では「鮭漁年歳衰退ニ趣クト同時ニ貸座敷ノ衰退モ正比例シ今ヤ三軒ノ貸座敷娼妓十七名ノモノモ殆んど維持ニ窮セル状態タルハ哀レナリ」と激変しているから、大正に入ると石狩町の賑わいも急速に失われて行っただけであろう。理髪業も漁獲量の激減に迫られる形で少なくなっている。

とは言うものの、街道ヒサさんや菊地欣吾氏の戦争前後の忙がしかった思い出が示すように、この地に踏みとどまった二軒の業者にとっては人口に比してまだまだ店の数が少なかった時代がしばらく続いたようである。

次に、菊地氏がこの数十年來の料金表を保管しておられたので、参考までに右に掲げてみよう。年を追うごとに表の項目も細分化し新しい技術も登場し、又呼称も時代を反映して面白いのだが、煩雑になるので、代表的な項目に限ることにした。年数は、表に明記し

てある場合のみ。

昭和	十四	二〇	三十三	()	()	()	四十八	五十一	五十二	五十四	五十六
総合	三十五	三二	一七〇	二〇〇	二五〇	三六〇	一〇〇〇	一五〇〇	一七〇〇	二一〇〇	二五〇〇
調髪	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇
顔剃	二十五	二五	九〇	一三〇	一八〇	三〇〇	八五〇	二〇〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二八〇〇
の	二五	二五	九〇	一三〇	一八〇	三〇〇	八五〇	二〇〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二八〇〇
顔剃	二五	二五	九〇	一三〇	一八〇	三〇〇	八五〇	二〇〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二八〇〇
の	二五	二五	九〇	一三〇	一八〇	三〇〇	八五〇	二〇〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二八〇〇
顔剃	二五	二五	九〇	一三〇	一八〇	三〇〇	八五〇	二〇〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二八〇〇
子	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
小	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
学	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
生	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
乳	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
児	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇

理髪業一代

——街道ヒサさんのこと——

街道ヒサさんは、大正六年十月三十一日、増毛郡大字雄冬村で一人きょうだいの二女として生まれた。旧姓井上、生家は漁業である。

幼い頃、次々生まれる弟妹たちの子守りをしながら、すっかり陽が落ちても家に帰れない事がよくあった。そんなヒサさんの眼に、村で一軒きりの佐藤理容院の、硝子窓越しに漏れるランプの光がまぶしく映り、「夜でも明るいランプをつけて家の中でする仕事はいいなあ」と、夜昼ない忙がしい我家に比べて羨やましく思ったという。

それが理髪師を志す下敷になったヒサさんの、はるかな思い出である。

床屋のランプに憧れていた気持が、次第にヒサさんの胸に現実的な夢として定着してゆき、小学校卒業と同時に、当別の菊谷理容院で年季奉公することとなった。奉公の期間は五年、ヒサさんにためらいは少しもなかった。男ならば徴兵で五年は取られる時代だったから、奉公の五年は抵抗なく納得できたという。

この五年の間彼女はただの一度も帰っていない。親方が帰れと言ってくれなかったからではあるが、自分でもそれが当然と思っていたのだ。この間親方が夜逃げして函館に住むことになった時も、一緒に函館まで行っている。間もなく当別には戻るが、この一事をみてもヒサさんの「夢」にかけたけなげな決心が伝わるような気がする。

こうして十二歳の早春、ヒサさんは他人よりは少し早い目に故郷と訣別した。おそらく彼女の眼が見やっていたものは、過ぎ去ってゆく懐しい光景ではなく長い人生の行手に待つ、自分自身の姿であったらう。

ヒサさんはこの時親から十円貰っている。当時、増毛から当別まで札沼線で二円五〇銭だったので、ヒサさんは汽車賃を引いた残金のうち二円五〇銭で荷物に入れ忘れた三尺を買い、あとの五円を預金しておいた。五年の間このお金には手をつけなかったというから、えらいものである。

その頃の奉公人は、現在のように理容技術を習うだけでよいのと違い、掃除洗濯はもとより台所仕事から子守りまで、まずは女中奉

公と同様の修業からさせられたものであった。

それで勿論無給である。甘やかされて育ったわけではないヒサさんにも、相当に厳しい弟子時代だったと思われる。

月二〇銭のこづかいを貰ったというが、フロ代が五銭、床屋が四〇銭の時代であれば、どう工夫したところでさして使い道はない金額であり、又使う時間の自由もなかった。

そんな頃の唯一の楽しみは銭湯へ行くことであった。もつとも「いっといで」と声をかけて貰えなければ出られなかったのだが、早くすませて帰り道に何か食べてくるのが実は何よりの幸福であった。あの頃食べたなべ焼うどんの美味しさは忘れられない、とヒサさんは目を細めておかしそうに話す。一抔十銭だったか十二銭だったか減多に食べられないごちそうだったのである。

年季奉公があけた時、ヒサさんは十七歳になっていた。親方は羽織と着物一式新調してくれ、こづかいを十円くれた。ヒサさんはそれに預金しておいた五円を足して故郷に土産をいっぱい買い込み、帰りの汽車賃は再た親に出してもらったという。いっぺんに大人になったような、晴れがましい十七歳の彼女の得意が伝わってくるような気がするのではないか。

その後、またお札奉公を無給で一年間、引続き職人として数年をそのまま働いて、二十三歳になった年石狩に来たのだという。

そのお札奉公の間、月々一円五〇銭のこづかいの中から、親方の真似をしてヒサさんは簡易保険に入っている。かけ金は月五〇銭、

彼女の辛棒強さと目端のきくさっぱりした気性が伝わるようなエピソードである。

結婚後満期になった保険金を「どうしましたか」と聞くと、「なんか子供のモノに使ったと思うよ」とのことだった。

ヒサさんが、街道栄太郎さんと結婚したのは、昭和十四年一月四日のことである。当時は珍らしくない事だったが相手とは一面識もなく、ただ「床屋であればいい、酒飲みでなければいい」とそればかりで、他の事はさして考えなかった。

その頃の事で覚えていることといえば、理容料金が当別で四〇銭だったのに石狩では三十五銭だったこと。それと、川向こうに渡るのに氷橋を利用してしたこと。海で育ったヒサさんには、この氷橋がこわくてどうしても渡れなかった。毎日の慎重な手れのおかけか、そういうえは事故など一度も聞いたことはなかったのだがついに渡らずじまいのまま、そのうち氷橋はなくなった。

冬といえは当時は除雪車など入らなかつたから、春先、鎌を運ぶトラックのために初めて除雪用のブルドーザーが、屋根ほどに高くなった道路の真中を、盛大に雪を吹き飛ばして進む様も、春間近を告げる年中行事のひとつとして思い出に残っている。

結婚して翌年、長女の節子さんが生まれた。すでに一家の働き手であったヒサさんには、育児の時間は殆どなく、弟子時代よりもつと忙がしい毎日が続いたようだ。舅の善一さんは、ヒサさんが嫁に

来た頃から好きな高山植物を求めて旅に出ることが多く、頼まれ、ば仕事もするつもりで道具は持って行ったが仕事は目的ではなかった。

石狩川のサケ漁は、ようやく川の汚染の為に打撃を受けてはいたが、まだまだ、二軒の床屋では多忙を極めるだけの客がいた。休日は月に一日きり、里帰りなど一度もできず、葬式で帰った時でさえ通夜の夜が明けると急いで戻らねばならなかったという。

そのうち戦局は悪化し栄太郎さんも出征することになる。節子さんが四歳の時であった。

いよいよヒサさんはひとりになった。昭和十八年のことである。

終戦前後の忙がしさは、全くひどいものであったらしい。睡眠二、三時間という日が続いた。「病気になつてもいいから眠りたいと思つたですよ」とヒサさんは言う。空襲警報が鳴って防空壕に入ると少しこのまま眠つてゆきたいと思ひ、解除の知らせが来るとほっとするよりがっかりしたほどである。

何しろ夜仕事仕舞したあとフロアへ行き、そのあと床屋に寄るお客が結構いたもので、すぐに十二時一時になつてしまふ。しかも朝は朝で漁師は早起きだから、六時には店を開けねばならず、憧れたはずの「家の中の仕事」も容易な仕事ではなかった。

客の途中で空襲というと、バリカン・鉄など一式を箱に入れてそれだけ持って逃げた。それさえあればどこでも仕事はできる、子供を養つてゆける。それは、おんな理髪師のさわやかな自尊心でも

あつたらう。

昭和二十三年には栄太郎さんも復員してきた。舞鶴の病院に収容されていたのを、ヒサさんは店を離れられなかったので舅の善一さんが迎えに行つてくれた。戦争の後遺症は夫の身体を蝕み、若いうちに老眼になり間もなく仕事にも差しつかえるようになったらしい。夫が無事戻つてくれても、そんなわけでヒサさんの手は伸々空くことがなかったようである。

戦争というものは、我々庶民にとって悪事以外の何ものでもない、しみじみ思いながら、ヒサさんの健康がその不幸をはねのける最も力強い守りだったとすれば、大きな政治の決定の前に私達民衆の砦の何と危ういことかを、思わずにはいられない。

今ヒサさんは、店を長男夫婦にまかせて自分は隠居の身である。長女は結婚し、次男は役場につとめてゐる。後顧の憂もなくつたので、いつ死んでもいいと思ひ切つて、乗れば大低落ちるかと思つていた飛行機にも昨年乗つてみた。「だけど、なんでもないものですね」とヒサさんは笑う。

今年の秋は足をくじいて入院してしまつたが、看護婦さんが驚ろく位、三人の子供達は入れかわつて連日のように見舞に来てくれた。「子供には恵まれました」とヒサさんは私に打明けてくれた。

同じだけ仕事にしても、人一倍したとしても、女であることで強いられた胸のうちをヒサさんも忍んできたに違いないが、おんな一代、自分で選んだ道の行手に悔はないと思われて、私はそこにヒサ

さんのいさぎよい生き様を見たと思った。



昭和17年頃の街道理容室
(立っているのがヒサさん)

花畔村の場合

—— 齊藤幸市さん聞き書きをもとに ——

齊藤理容院は花畔農協の真向かいにある。ここでは齊藤さんの前に金森テツヘイという人が、やはり理容院を経営していた。その前はわからない。昭和十三年金森さんから譲り受ける時、相手が相当高令であったのを覚えていることと、大正七年に齊藤さんが父親の仕事（船大工）の關係で新町から花畔村に移ってきた時すでに、金森理容院は村に一軒きりの、花畔の地に馴染んだ店構えであったことを考え合わせると、明治末年から開業していたものと推定できようである。

齊藤さんは明治四十五年の生まれで、年季奉公は十七歳から二十三・四歳まで、ヒサさんの弟子時代とほぼ同じ時代である。二人の奉公事情は、男女の差か年令の差か、それとも親方のせいかなり違う印象で、幸市さんは比較的自由な雰囲気の中で、親元へも時おり帰っている。奉公先は、札幌北区の川端理容院であった。それでもやはり今とは比較にならない。冬になると朝メシ前の煙突掃除と雪かきは幸市さんの仕事であった。

奉公時代といえば高足駄の思い出がある。当時の奉公人は年令が一般に低かったせいもあって高い客用椅子に届かないので、親方は

時には二〇センチもある高足駄をはかせたものであった。幸市さんも背が低かったのだが、川端理容院の親方はかえって七・八センチ位の足駄を与えたという。「背のびすることを忘れると一層背が伸びない」というわけである。その足駄の齒の裏に、幸市さんは自転車屋から古タイヤのゴムを貰ってきて貼った。滑らないように、また音のしないようにという配慮である。「さて親方の親心の効果はあったかなあ」と笑いながら、この懐かしいむかし話を齊藤さんは語ってくれた。

齊藤幸市さんは、始め茨戸で開業しその後花畔に戻っている。商売の事を考えたら、このまま茨戸にとどまるか叔父の勧める美唄へ行く方が将来性もありそうだったのだが、花畔を動きそうにない父親への孝行のつもりもあって決めたという。

事実、街道さんや菊地さんが客に追われていた十数年の間も、点在する農家が相手の花畔では、たった一軒の理容院さえ満足に立ち行かない有様だったらしい。ヒマな時間には自家用の畑を耕し、幸市さんは戦争中は消防隊員に登録して、空襲警報のしらせがあると村の櫓によじのぼって半鐘をたたくのが役目であったという。この櫓は八メートルは有にあるという高いもので、齊藤さんには相当これが苦痛だったらしい。日に何度か往復する事も多く、そんな時は文字通りいのちがけの仕事であった。「戦争中も、トコヤの方はヒマでしたねえ」という齊藤さんの言葉は、ヒサさんの思い出と比べると両地区の相違がよくわかって興味深い。

齊藤理容院が、どうやらこうやら現在の建物に新築できたのは昭和三十三年のことで、開業以来二〇年を経っていた。客が増えたからではなく古い家が限界にきていたからであるが、そのうち新札幌団地ができ、花畔団地が建つようになって、やっと花畔も徐々に人の往来が増えるようになる。

かつて、「住民ハ皆原野ノ区画地内ニ散在シ敢テ密集部落ヲ為セル所」がなかったのは、「砂地ノ上些少ナル腐植質壤土被覆シ地味肥沃ナラズ」だった故でもあり、海辺に接し常時汐風が吹き荒んで農作物が被害を受けるのを防ぐためにこそ、村民が互いに協力しあって育ててきた風防林も、今では守るべき畑を失ってしまった。

こうした花畔の変貌に、助けられた人もいれば追われた人もいたのであろう。

齊藤幸市さんのお話を伺いながら、まことに人の一生ほど様々であるものではなく、それなのに必らず、大きな歴史の流れに無縁ではあり得ないのだという、そうしてそれが当り前のことなのだろうという思いを深くしたのであった。

参考資料

「石狩町沿革誌」

「九町三村時代の石狩」

「石狩町300年のあゆみ」

北大中央図書館内北方資料室所蔵
村山家文書中に包蔵せる

井尻静蔵家文書目録

長谷川 嗣

井尻静蔵父を半左衛門と言、文政十一年一月鹿児島に生れたりと言ふ。明治十年丑二月十八日子静蔵と共石狩に籍を移せり。時に半左衛門五十歳子静蔵は安政元年の生れにて二十三歳なり。これより先静蔵十六歳にして大阪に出て、忠実勤勉に商業を見習うこと五年間、既に石狩小樽間を往来して商業を営む父半左衛門を助けんとして石狩に來りしは明治八年にして、半左衛門が開拓使御用達林徳左衛門代理の名のもとに村山家の石狩漁場の使用権を入手した時であつた。時に漁業不案内の爲村山家の藤田利兵衛を手助けとして借入れ専ら漁業に専念せるにより其業漸く盛なり、父歿せる後家を継ぐ、この後河野常吉翁の言を借りて言へば、「其家漸く富むや乃ち小樽に倉庫を建設して、石狩漁場より回送する所の海産物を藏置す。後他の同業者より委託を受け、其の数量漸次増加せしを以て、規模を拡張して、純然たる倉庫業を開始せり。小樽に於ける倉庫業創始の功は、静蔵にありと言ふ。十六年以降更に厚田に鱈漁場を開き、石狩の鮭漁場と共に盛に營業し、当時石狩厚田二郡漁業者中に冠た

り。其の結果巨富を致し、資産本を以て目せらるるに至れり。又公共の爲に力を尽し、石狩厚田地方の公共事業に、金品を寄付する所少なからず。三十五年一月十七日歿す。

其子某嗣ぐ、又父の名を継ぎて静蔵と称す」とその「北海道史人名字彙 上」巻に記されて居る。編者はこの二代目静蔵の長子、北海道での井尻家の四代目の正二氏より依頼されてこの目録を作成した。正二氏とは古生物学者として有名な井尻正二氏であり、本篇は編者が十年來取組んで居る村山伝兵衛以來の村山家の文書目録から抜いで正二氏に御送りしたものの控である。

村山家文書中の井尻家文書目録

村山家番号	年 月 日	内 容	宛 先	書 出 人
No186	明治8 亥 4 月 7 日	村山家と井尻半左衛門の間に取交されたる 約定書下書 (32cm)		村山金八郎
No187	" 4 月10日	同上に対する井尻家よりの念書 (114.2cm)		井尻半左衛門
No188	明治8 亥 4 月13日	収税品願受代金3千円上納方再延期願	松本十郎殿	代 加藤円八
No189	"	金3千円也納入方決定ノ上乍恐奉願上候	松本十郎殿	林代 井尻 ㊟ 森亀太郎 ㊟
No190	" 亥 4 月15日	2千円上納 尅千円延納 上納方奉願上候 奥付付	松本判官殿	林代 井尻半左衛門 ㊟
No191	" 亥 4 月17日	金2千円也利息 180円也領取証	井尻半左衛門殿	民事局
No213	明治8 年 6 月23日	収税鯉代千円利息20円也領取証	井尻代 加ト円八殿	民事局
No238	明治10年丑 2 月18 日	井尻半左衛門送籍届状	鹿児島県下第三大 区戸長瀬戸山市郎	
No239	明治11年 6 月24日	石狩横町へ転住届	調所慶大殿	井尻半左衛門
No250	明治10年 6 月16日	竹原塩 5 俵盗難届	"	井尻代 円八
No251	" 6 月18日	稼方土人(ツイシカリ住 150人) 拝借願	開拓使長官殿	" 円八
No266	明治8 年~全10年	西浜・貞寧網漉賃他基帳(半紙二ツ横折 9 丁綴り)		
No267	"	石狩郡漁場4ヶ統収獲高並諸入費調計算表 (青罫半紙8丁綴り)		
No268	"	魚獲高及諸入費8, 9, 10年平均調(美濃 大判罫 10枚綴り)		
No275		祝丸(146石積) しっぶ浜にて破船に付船御 税之儀ニ付奉申上候	小樽船改所御中	井尻半左衛門船占 中村定吉
No308	明治12年11月 2 日	金 150円也 筋子百樽代受取証	加藤円八殿	井尻半左衛門
No326	" 14年10月 5 日	溺死人之儀ニ付公書御渡願	戸長役場御中	半左衛門代 静蔵
No336	" 15年 3 月 3 日	井尻清太郎鯉漁業の為小樽へ分家願	旧石狩郡長 山崎清躬殿	静蔵・円八
No379	" 17年 9 月10日	念書一札	村山その殿	井尻静蔵
No384	" 18年 3 月20日	金 4,680円の年賦証書	林麒一郎代 井尻静蔵殿	村山その
No385	"	同上に対する約定書及委任状	"	"

No386	明治18年 5月27日	拾物御届	石狩分署御中	井尻静蔵
No387	" 6月29日	念書	村山その殿	井尻静蔵
No389	" 7月23日	石狩鮭漁場入札広告 (和紙3枚)		札幌県
No391	" 8月1日	公証付 売券証 (17枚)	村山その殿	井尻静蔵
No406	明治19年10月12日	金5千円借用証書 (13枚)	谷吉三殿	田口梅太郎 清藤源太郎
No407	"	" 引当副証書	"	井尻静蔵
No408	明治19年10月12日	公証取消願	親舟公証役場御中	井尻、村山代
No686	明治20年 9月24日	金7円50銭也花畔小学校寄附領収証	井尻静蔵殿	学務委員橋本賢弘 総代人 山本多蔵
No448	明治22年	石狩四漁場及持船使用人数数調 (2枚)		
No443	明治18年~24年	持船数調 (2枚)		
No443	明治23年	石狩川下ヤウスバ鮭漁場修膳願届	石狩漁組 事務所御中	井尻代 加ト円八
	"	下テイネ鮭曳網修膳届	"	"
No504	明治25年 7月11日	白米3俵ワラジ壹個ヒップ引渡被下度覚	㊦ 御店	全
No505	" 7月13日	白米1俵斎藤重三へ被貸渡度き覚	㊦ 御店	福三 ㊦
No507	7月25日	薄べり10枚ヒップ渡 覚	㊦ 藤掛り御中	全店
No509	7月26日	草鞋1個 桧綿1メ目養生芝へ 覚	㊦ 御店	全㊦
No508	7月29日	飯茶碗30人皿30枚ヤウスバへ 覚	"	全本店
No510	7月31日	桧綿1メ目ヤウスバへ キ	"	全㊦
No511	"	皿30人前シッパへ被渡度 記	"	全店
No512	8月6日	玄米6俵白米4俵味ソ2樽ヤウスバより	㊦ 倉庫掛御中	全㊦
No513	8月10日	桧綿2メ目聚富へ渡され度 記	㊦ 御店	全㊦
No514	"	草鞋2個 ヤウスバへ 記	㊦ 御店	全㊦
No516	8月12日	桧綿2メ目ヒップへ 覚	㊦ 倉庫係御中	全㊦
No517	8月15日	薄べり10枚古谷へ被渡下度	㊦ 御店	全㊦
No518	8月19日	味噌1樽古谷へ被渡下度 覚	㊦ 倉庫係御中	全店㊦
No519	8月21日	味噌養生芝へ 覚	㊦ 御店	全㊦
No520	8月23日	釘1寸 600匁 1寸5分 300匁被渡度	㊦ 御店	全本店㊦
No521	8月30日	白米1俵斎藤重三へ貸渡願度 記	㊦ 御店	福三(直筆)
No522	9月6日	醤油壹樽ヒップ依頼	㊦ 御店	全店㊦
No523	9月5日	釘1寸5分 500匁 右聚富へ依頼 1寸 300匁	㊦ 御店	全㊦
No524	9月16日	味噌1 草鞋2個古谷へ 覚	㊦ 倉庫係御中	全店㊦
No531	10月3日	白米1俵斎藤重三へ渡され度キ	㊦ 御店	福三 ㊦
No532	10月9日	酒壹樽養生芝へ御渡被下度	㊦ 御店	全 ㊦
No535	11月28日	白米1俵斎藤重三へ被貸渡度	㊦ 御店	㊦
No497	明治26年	税及諸入費 皆済切符渡され度(メモ)	加藤	全店

No479	明治26年以降	石狩両岸人名覚 (半紙横二ツ折5枚) (石川酒店の名あり 26年6月以降と判定)			
No573	明治28年2月	第4回国内勧業博出品運賃付届書			村山、井尻代 加藤円八
No574	"	全上草稿及先開出品調等3点			
No607	明治29年7月6日	金70円也 領収証 (2枚)	全 御店		㊦ 店
No610	"	"			
No608	明治29年3月16日 ~7月26日	金銭(出入不明)覚記	㊦ 御店		一全
No628	明治30年1月28日	貸下地雑立木売却約定書	石狩 全御店殿		高嶋晴信
No632	明治30年2月15日	金15円也 体練具買入寄附金領収書	井尻静蔵殿		加藤一魯
	2月15日	4口合36円の内より井尻家預り 10円差引御渡有之度覚	加藤円八様		加藤一魯
No640	明治30年3月28日	明治29年第5期納税 領収証(5枚)			井尻静蔵
No643	" 4月16日	明治30年度第1期他戸別割営業割(2枚) 白紙委任状 (2枚)			井尻静蔵 井尻静蔵
No1131	明治30年5月8日	×2円09銭 領収証(印刷)	全 様		伊藤薬店
No1132	明治30年5月31日	金10円也 受取証	㊦ 御店		一全
No665	" 7月9日	" " 地租(1枚)			井尻静蔵
No703	" 7月6日	石狩郵便局電信為替金領収証	松永泰		井尻静蔵
No783	"	石狩郵便局書留受取証	受取人 松永泰		出人 井尻静蔵
No1133	" 7月18日	杉海貝長9尋5枚長8尋12枚請取証	小樽港 全御店		石狩 ㊦ 店
No1134	" 7月24日	杉海貝長9尋3尺5枚長8尋3尺11枚味噌 5樽受取証(請取ウラ書及金3円60銭支払 済記入)			全店
No674	明治30年7月30日	札幌太井尻家鮭漁場借用証(春秋分)	井尻静蔵代 加藤円八殿		茨戸 能登慶太郎
No678	" 8月18日	オタビリ漁場貸借約定証	"		花畔 岡崎利三郎
No679	" 8月25日	30年第2期納税領収証(8枚)	"		納税委員 畠山清太郎
No680	" 8月27日	鯨船ニテ長材7本積込送状 オンコ材8本他材料石数記(2枚)	全 御店		㊦ 店
No681	明治30年9月2日	8口合31円98銭7厘請取仮証	井尻代 加藤円八殿		納税事務所
No688	明治30年9月	村山家復興祝賀に当り井尻家への表彰文案 (田口梅太郎と共に六通)			
No717	明治31年1月	第4期税8口39円98銭4厘領取仮証	井尻静蔵殿 藤田利兵衛殿		納税事務所
No709	明治31年1月15日	金20円也花畔宇ヤウスバ鱒漁場借用証	代 加藤円八様		池田宇之助
No720	明治31年2月25日	加藤円八を代理人とする届	札幌支庁長 村上光殿		井尻静蔵
No729	明治31年3月25日	第5期No.43. 45. 48号領収証			納税委員 畠山清太郎

	明治31年 3月25日	第5期14. 16. 17. 34. 35. 36		
No730	明治31年 3月28日	30年地租2.3期分領収証及書簡封筒入(19点)	井尻静蔵殿	札幌外4郡 戸長役場
No737	明治31年 4月4日	31年第5期分8口合39円98銭9厘仮領収証	代 加藤円八殿	納稅事務所
No739	明治31年 4月12日	稅不足金1円26銭1厘送金納入ニッキ精算	井尻静蔵殿	全 上
No760	明治31年 6月25日	31年1期納稅No43オタビリ分領収証	井尻代 加ト円八殿	納稅委員 畠山静太郎
No761	"	" No45 札幌太領収証	"	"
No762	"	" No48 カマヤウス "	"	"
No763	"	" No34 ウツナイ "	"	"
No759	"	" No16下ヤウシバ "	"	"
No764	"	" No17上ヤウシバ "	"	"
No764	"	" No35	藤田利兵衛名義分	"
No765	"	" No36	"	"
No771	明治31年 7月5日	31年鱒稅50円也鱒稅二口分仮受証	井尻代 村山代 加藤殿	"
No796	明治33年12月15日	売上請求記	全 御印様	高橋
No851	明治33年 5月25日	鮭一尾ツツ永山他六軒へ贈られたき依頼	加藤様	イシリ
No850	6月21日	小樽にて小間物商開店多忙ニ付明日參上書簡	加藤様	井尻静太郎
No853		井尻静蔵38歳他4名年齢調記(小樽郡色内町41番地住)		
No854	6月23日	石狩にて薪50數買入方依頼書他①—⑦	㊦ 御店	厚田 全 漁場
No883		石狩町両岸及しつぷ小樽知人名簿 (横長半紙二ツ折8枚綴)		
No884		石狩厚田名簿(35名)(伊達正人)		
No885		小樽人名簿(24名)		
No867		石狩郡石狩川堤防拝借地坪數調(甲52151坪7325)		願人 井尻静蔵
No879		小樽よりの米代価至急知らされたく便り		全 井尻
No880		全 ㊦ 米蔵在庫調(2枚)		
No1125	明治33年 8月25日 ~12月28日	金錢渡振替仕訳控(1—7)	㊦ 及全控類	
No1135		(全 ㊦ 兩漁場支払控?)		
No1168 ~1181迄		剪紙 14枚(請取類)		
No1184	明治33年11月9日	葦2束渡被下度記	全 帳場御中	古谷
No1185	12月28日	金9円50銭品代領収記	全 御印様	㊦ 大瀧
No1208		明治12. 13建物敷地、海産干場他諸稅 (内訳井尻半左衛門、長浜吉松、磯部豊八、 対雁移民〔共有〕)		

子供にきかせる石狩町の昔話 II 花川南地区

鈴木トミエ

十一月中旬の、さむい、さむい日でした。この日は朝から粉雪が降り、今年一番の冷えこみで夕暮には、道の水たまりは氷り、小さな吹雪模様になっていました。

私が、家へ訪ねて行くという再三の申し出を断り、岡崎義夫さんは私の自宅へ自転車でのりついで来て下さいました。十一月二十一日に、おおよそ児童館で企画した「第一回石狩町の昔話を聞かせる会」の打ち合せのためです。私が勤務している石狩町おおよそ児童館では、「自分達の住む町を知ってこよう」というテーマをもうけて行事の中に、それを取り入れてきています。五十六年二月には、「石狩町を知る母と子のスライドの集い」をもち、スライドを見ながら石狩町を知ろうとしました。特に大人の参加も目立ち、大人だけ集まって、「石狩町の昔と今」の話し合いをしました。又、九月には、石狩町内出土の縄文土器をみながら説明をうけ、石狩町の土器を使って、自分たちで縄文土器づくりの体験をする中で、昔のくらしを知ろうとしました。昔の人達が生きたであろう野焼にも成功し、嬉しそうに土器をかかえて行く子供達をみてほっとしたものです。

そして今日、岡崎さんとの話し合いは、この土地で生れ、育った岡崎さんから、五十年前の花川南地区の昔話を聞かせて頂くための打ち合せによるものだったのです。

これから書く事は、その話し合いの中からのものです。

岡崎義夫さんは、大正五年生れ、今年六十五歳になります。花川南一条一丁目の今の住いで生れ、ずっとこの土地で育ったのです。南一条一丁目の一角は、岡崎さんの土地だったので、おおよそ児童館の土地も、もとは、岡崎さんのものだったのです。あついで番茶をすすりながら、遠い昔を思い出すように話しは始まりました。

そうだなあ、私のおじいちゃん石川県の人で開拓農家として、この南一条一丁目に最初っから住んだんです。私がもの心つくころには、この辺一帯はすでに畑になっていましたよ。畑には燕麦が蒔かれていました。燕麦は馬に食べさせるんです。燕麦はどうやってつくるか？ 春に種を蒔いて、夏になったら刈り入れをして束ねて、畑に積み上げておいて乾すんです。そのあと、「からさお」ではたいて実だけにして、それを俵に入れ出荷するんですよ。

燕麦の他に亜麻も畑には植えていましたよ。亜麻は、札幌駅近くの帝國製麻という工場が昔あって、そこに出荷するんです。これも春蒔いて夏、刈り入れ、くきを乾かして、このくきを売るんです。亜麻は、テントやズック靴の製品になります。当時、戦争が続いていたので、この亜麻はずいぶん軍用品には使われていたねえ。

除虫菊も植えていましたよ。除虫菊は菊の花だけをとり、乾かしてそれを工場に売ります。工場では、それを粉にして殺虫剤にするんですよ。

岡崎さんは、当時の畑の様子を教えてくださいました。ちょうど除虫菊の話が出ましたので、すでに、石狩町郷土研究会の金子伸久さんから教えて頂いた除虫菊の話を少しここでふれてみましょう。

金子さんのおじいさんは、明治二十年、新潟から花畔へ入植し、北海道ではじめて除虫菊の栽培をした人です。除虫菊は、和歌山県や岡山県が本場といわれていますが、この花畔も砂地であるところから、除虫菊に適した土地といえるのでしょう。春に種を蒔き、六月中旬から七月中旬までには花をさかせます。

いちめん除虫菊の花が咲き出すと「せんば」という道具を使って花だけを取ります。これを乾燥おりにならべて、二日間位いで乾かすのですが、この時が勝負です。なぜ？というと、天気が、かんかん照りだと銀色に、いい色した仕上りになりますし、良くない天気だと銀色にはならず、色が悪いということと商品価値が下がってしまうからです。

花をとり、乾燥させる作業は、ほぼ一ヶ月間に集中して行われるわけですから、目のまわるようなそがしさだったそうです。もちろん、子供たちも、この作業にかり出され、かご一ぱい花をとったら、いくら、と駄賃をもらったそうです。

この時期が終って、冬の一段落したころ、石臼で乾燥した除虫菊

を引いて粉にし、のみとり粉に使用しました。もちろん、電灯がともった大正八年以後は、手まわしから動力機になり、仕事も楽になったそうです。

金子さんの家では、栽培ばかりだけではありません。道の許可を受けて、殺虫剤の販売もしました。除虫菊を粉にしたあと、罐につめて、出口には穴を数ヶ所あけて、ふると、粉が出るように仕組んであります。ちょうど、調味料のいれものみたいな、形ですね。そのころ主に、果樹園に売り出されたり、家畜の、のみとり粉などに使用されたといわれます。

石狩町では、どんどん除虫菊の栽培をする農家が増え、大正六年には石狩町の除虫菊組合が出来、やがて、北海道各地にも、除虫菊を栽培する農家が、ふえて行きました。札幌市の琴似に北海道除虫菊組合もでき、昭和七年には、「ハルク」という名前の水溶液の殺虫剤をつくって工夫するまでになったそうです。

戦後、アメリカからDDTなどの化学薬品が入ってきました。殺虫剤が強力になるに当たって虫の生命力も強くなって行きます。農薬の中には、人間の体に害を与えるものさえ出てきています。除虫菊の殺虫剤は、そんなことなかったのにネエーと金子さんはいっておられました。

昭和三十五年まで、金子さんはがんばって除虫菊の栽培を続けました。残念ながら、時代の流れに勝てなく、止めざるをえなかった金子さんは、除虫菊の「カブ」だけでも残し、花を毎年咲かせてみたかった。と言っておられました。

岡崎義夫さんのお話にもどりましょう。

さて、南一条一丁目の昔の畑には、燕麦、亜麻、除虫菊、小麦、そして、ソバ、また一年中食べられる野菜が広い土地にびっしり植えてあるわけですから、子供達の仕事はたくさんありました。

そうさねエー。あのころは、三度の御飯の後かたづけや、三時になると、いも・かぼちゃを煮て畑へもっていったもんです。おやつですよ。畑の草とりなど、もう、いやになるだけでした。私の父親は軍隊で馬丁をしていたもんですから、馬の手入れは、それはそれは厳しくしつけられたもんですよ。馬の耳から鼻まで掃除させるんです。その後、私は軍隊に入りましたが、このことは役立ちましたかね。畑仕事も、小学校高学年になると一人前にカマもって刈り入れの手伝いもしましたよ。

それにしても、畑おこしなどの農作業が、馬から機械に変わったので、馬も必要としなくなったものネエー。活躍するのは競争馬くらいのもんですよ。だから、燕麦も必要としなくなった。除虫菊だって、殺虫剤が、化学薬品になったのでこれも必要としなくなつた。亜麻だってそうです。ズック靴や、テントも化学繊維がつかわれるようになった。

昭和二十四年、この地区も、水田を造ろうということで排水工事を続けてきて、この年に完成しました。当時、砂地に米を植えるのは無理といわれたけれども、米は、たくさんとれるようになったんですよ。その米も、後に農協の倉庫に積みあげられるようになったんです。畑は、水田にきりかえていったんだけど米が積み上げるよ

うになるんではねエー。将来の事を考えて、昭和三十九年、南線地区では五十二戸の土地所有者が集って、当時の内外緑地の、団地造成計画に賛同して、土地を手はなしたのです。そして出来あがったのが、今の花川南団地です。

五十年前、クマがいたかつて？ いや、もうこの辺にはいませんでしたよ。私の父親の代に、開拓当時には、いたそうですがネ。小樽まで塩を買い出しに行くときなんか、おっかなくて、あきカン、ガンガンたたいて、クマの出でくるのを防いだそうです。私の小さいころには、まだ開拓されていないところには、クマが出たという話はききましたがね。

それより、夜、十二時ごろになると、家で飼っているニワトリをキツネが襲いにくるんです。キツネのあの口はすごいですからネ。ニワトリの首を一発でかみきるんですから、もう、大へんなもんです。このキツネを殺すのに、畑の作業につかうホークをもって、ムシロをかぶって、じっと待つんです。キツネは、臭いや音に敏感ですからね。じっと静かにしているんです。そして近ずいて来たところで、いきなり、ホークをつかって刺し殺すんです。つかまえたキツネは、えり巻きにして今でも持っていますよ。イタチやタヌキは、もう、しょっちゅうみましたよ。今の紅葉山、昔は、もみじの木がほんとうにあったんですがネエー。あそこに行くとき、だまって坐っているだけでも、リスなんかチヨロ、チヨロ出て来ましたよ。

海や川に集まるもの話だつて？ そうだネエー、七線浜にいくと、わたりガニがたくさんいましたネエ、砂浜にチヨロチヨロあが

つてくるんです。竹の棒でキュツと、はさんで、いくらでも採れたネエ。七月にはあざり貝、八月にはホツキ、サバやニシンも採れたしネエ。近くの川や家のまわりの排水口には、ドジョウやトンギョというとげのついた魚がいましたよ。フナもよく天然川にいたもんです。最近、屯田の方で水田がつからなくなって農業つかわなくなつたら、この川にもまだトンギョがいて嬉しかったですよ。

自然にふれること、そのことが子供の遊びだったネエ。

そうだ、冬になるとネ、あそびに使うスキーもつくりましたよ。

どうしてつくるかって？ まずね、白樺の木が一番すべるんですよ。この木を自然に乾かして板にするんです。先っぽを切って今のスキーのように曲げるんです。この曲げかたですか？ お湯の中に二・三日つけるんです。もちろん、おもりをつけて、しのらせてゆくんです。ゆっくりネ。あとは馬の金具のきれっぱしをつけて靴を入れるところをつくればいいんです。

色を塗ったかって？ そんなことしませんよ。雪が降るでしょ、ズボズボと埋ってしまう道では、カンジキを履くんです。そうしたないと、埋って歩けなくなってしまう、これもつくるんです。ぶどうの木が一番いいんですよ。竹？ 竹だと軽いけれども、すべて歩けなくてダメですよ。

つくる話で思い出した。ソバだつてつくって食べましたよ。ソバですか？ 六月末頃に種蒔いて九月には刈り入れます。カラサオでたたいて実だけにして、ひき臼を使って粉にするんです。その粉をつかってソバをつくるんです。私の家では一年間で、二十俵は食べ

ましたねエー。そのころ内地米は手稲まで買い出しにいった。一俵十円くらいで、旭川米は七円でしたよ。

岡崎義夫さんから、うかがったお話は、これでおしまいです。岡崎さんは、ますます強く吹いてきた雪の夜に自転車で帰ってゆかれました。「こんな寒さなんて、満州の寒さにくらべたら、たいしたことないよ。」という元気な声を残して……。

私は最近、昔話を聞くためにいろいろな人達に逢います。そのたびに生きてきた長い過去の重さをひきずって対処してくれる相手に、自分はどれだけの話を引き出し得るのか、そして、書けるのかなど、考えこんでしまうのです。その度に、うまく書こうとか、良くみせようとか、という気負いは捨て、素直になろうと思うのです。

幸いにも、十一月二十一日に、児童館で企画した「第一回石狩町の昔話をきく会」は、八十名の子供たちが参加し、この日、石狩町の伝説「サケとわかもの」を再話し、紙芝居にしてみました。

企画当時、二十人でも、三十人でもいい、小さな会でも、長く継続させたいなあ、でも何人集まるかなあ、今の子供たちは、昔話に興味があるかなあ、など心配もしたのですが、子供達の元気な質問の声に、私の心配も吹きとばされてしまいました。

素直に言えば、「今の子供達も昔話を聞きたいのです。」自分達の郷土を知って行くという学習は、学校教育の中で、そして児童館の中で、また子供の集まるさまざまな場所で、形を変えて、子供達の中に浸透していけたらなあと思っています。今の私が、この場所にいる限り、長くこの企画は続けていきたいものだと思います。

子供にきかせる石狩町の昔話Ⅲ 絵本「サケとわかもの」

作・鈴木トミエ



おだやかな 秋の日でした。

木の葉は赤く染り そのすき間から こもれ陽が さしてしました。あたりは静か…… 水のせせらぎ だけが 聞えます。

流れにそって 水面をみていると 一人のわかものが 身をかがめて 右手を水にひたし 目をとじ なにかつぶやいています。

そつとみると 水底では 魚が つぎつぎと わかものに近づいていくではありませんか。

(神様が魚をくれた)

アイヌのわかものは、手ずかみで それをとりあげ カゴの中に入れました。ウロコが 陽に照らされて、銀色に光っていました。



漁をおえると わかものは 川を下って、あるき出しました。

ピーヒョロロロ ピーヒョロロロ

大切にしている 笛をふきます。

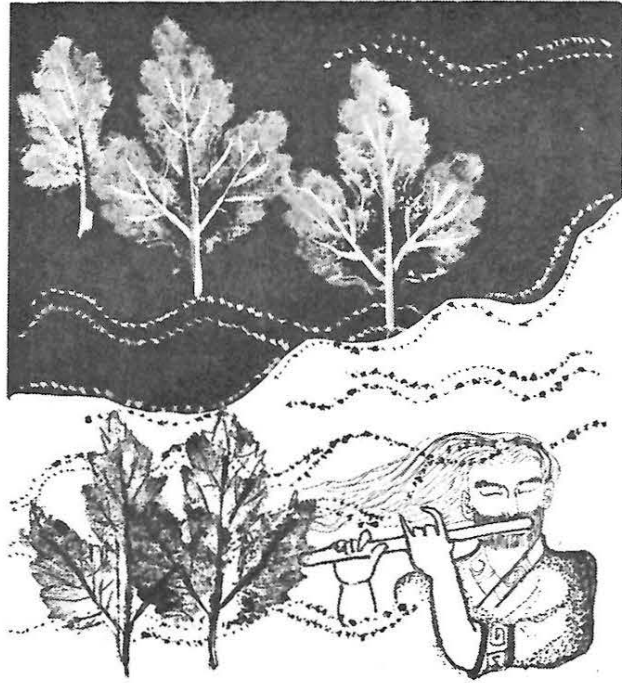
ピーヒョロロロ ピーヒョロロロ

歩きながらふく 笛の音は、いつもより すきとおって きこえます。

ピーヒョロロロ、ピー ピー

笛の音は 風にのって 森の中をかけめぐり 秋のすみきった空

いっぱい
に
広
が
り
ま
し
た。



いつのまにか 陽はかたむき 空は美しい あかね雲に かわり
ました。

夕やけの中で

家も 木も 草も 花も かげ絵のように ゆれていきます。

鳥は 巢へかえり 虫の声も ありません。

…… もう とつぷりと 陽はくれ 夜のやみの中に 入って
きました。



ピーヒョロロロ ピーヒョロロロ

……

わかものは 夢のような ここちが してきました。

道ばたの草は 夜つゆを ふくみ足をしつとりと ぬらします。

ピーヒョロロロ ピーヒョロロロ

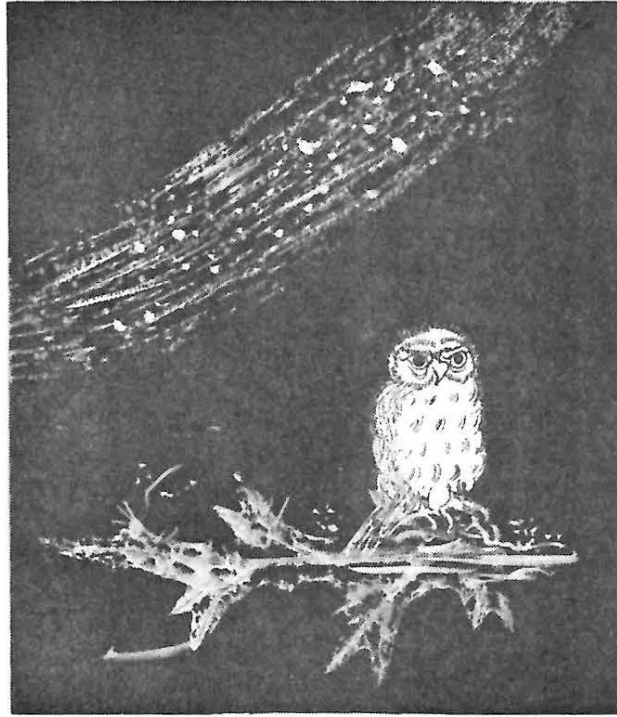
……

なおもまた 笛を ふきつづけます。

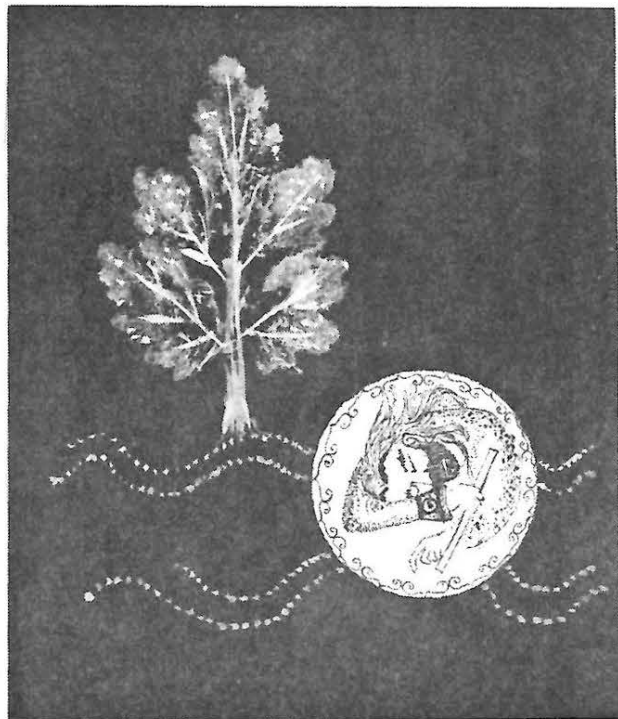
その美しい笛の音に けものたちは 息をひそめ あいました。

みあげると 夜の空に 月はさえ 星がいちめんにかがやいて
います。

天の川も くつきりと みえました。
遠くから エゾフクロウのなきごえも きこえてきました。



……どこを どうあるいた というのでしょうか。
わかものが あるいていたのは 夢の中だった のでしょうか…。
同じ場所を ぐるぐるまわり していた だけです。
深いためいきを もらした わかものは 倒れるように 大きな木
の下で ねむってしまいました。



「わたしに 笛をふいて ください。」
「もう一度 笛をふいて ください。」
だれかが よんでいます。
深いねむりから さめて 目をあけると そこには アイヌの娘が
すわっておりまして。
かがやくばかりに 美しい 娘でした。
わかものは たのまれるままに 笛をふきました。
たかく、ひくく、つよく、よわく ……。

娘は わかものによりそい 笛の音に耳をかたむけます。
笛の音は やみの中に すいこまれて いきました。



娘は立ちあがり わかものがふく 笛にあわせて 舞いはじめました。

そのすがたは 月の光にてらされて 虹色にかがやいています。
娘はしだいに 宙を舞い 遠くへ消えてしまいうに なりました。
わかものは 強く笛をふき 娘をよびもとしました。
踊るすがたに うっとり みとれていると

あちらからも こちらからも 笛の音がこだまして きこえてきます。
わかものも いっしょに 舞いはじめました。
体の中に あついものが ひたひたと 流れ、
しだいに とけていくのが わかりました。





..... 一夜があけました。
 わかものが かえらないので コタンは 大さわぎです。
 村中を さがしましたが みつかりません。
 とほうにくれていると なかまの一人が さげびながら こちらへ
 やって きます。
 「おい、みつかったぞう。」



コタンの人たちは 砂塵さじんをあけて かけつけました。
 石狩川の流れにそって 走りつづけます。
 秋の風が ほおをうち 髪をなでます。
 ひたいの汗を こぶしで ふきました。
 わかものを みつけた 村人たちは つきつきと 名前をよびまし
 たが 答えはありませんでした。



わかものは 川べりで 笛をだいたまま 死んでいました。
そのそばには 大きなサケが 一匹 よりそうように 息たえて
いました。

…… みずみずしい 朝の空に 鳥も 虫も 花も 風も ゆれ
ていました。

ピーヒョロロ ピ、ピ、ピ、

風につて きこえてくる あの音は……

こだましてくる ふえの音でしょうか …… それとも
小鳥のさえずりだったのでしょうか。

~~~~~

あとがき

石狩町の伝説「サケとわかもの」をもとにして、この絵本を創り  
ました。

はじめ、この伝説を読んだとき、サケは、生れたふるさとに必  
らず帰ってきて卵を生み、その一生を終えるという神秘さと、とも  
に、サケが、化身して人間のすがたになり、わかものそばにいた  
い、という女心が、アンデルセンの「にんぎょひめ」の物語とかさ  
なり、いつか絵本にしたいという心が、だんだんとふくらみはじめ  
ました。

### 第3号の編集を終えて

第3号は、前号より若干ページ数が少なくなりましたが、駒井さん、金子さん、鈴木さん、そして長谷川さんに書いて頂きました。

長谷川嗣さんは、生振村に住んでおられる方で石狩町誌の編纂、また北大中央図書館で村山家文書の研究に取組まれています。

五六年の会活動は、夏期に札幌村郷土記念館見学と北海道文化財展見学の二つの行事を組みました。札幌村郷土記念館は小さな建物ながら、大友亀太郎以来の資料が整理展示され、札幌村の開拓の歴史が一目でわかるようになって大変好感のもてる展示でした。石狩町には、まだ博物館も郷土館もないので非常にうらやましく感じられました。

北海道文化財展は、全道の色々な文化財を一同にあつめて展示する試みで、石狩町からは弁天社の「閑羽正装図」が出品され、好評のようでした。今後も会全体で見学会、研修等を実施していきたいと思えます。

三号雑誌という言葉がありますが、「いしかり暦」も「三号雑誌」と笑われないように、次号からさらに頑張っていきたいと思えます。

(石橋孝夫)

いしかり暦 第三号

昭和五七年一月三〇日 発行

発行者 石狩町郷土研究会

編集 「いしかり暦」編集委員会